# 知力育む

## 地域産業研究　経済学部・遠山ゼミ

### 知的財産活用アイデア全国大会
### 車載型ペットロボットを提案

川崎市を中心に地域産業や中小企業を研究する経済学部遠山ゼミ（指導・現事業づくりに取り組んだ。富士通の開放特許を競う「知的財産活用アイデア」川崎・横浜地区プレゼンテーション（12月1日、川崎市）に、4校が出場。原さんは残念ながら入賞を逃した「緊張して、ロボットを地元川崎の技術で作るという契約での情報提供義務について大事な部分を言い忘れてしまった。でも、ゼミ生の協力でここまでまとめることができて満足です」（原さん）

▶プレゼンする原さん（左）と菅野さん（2年次）

＝遠山浩准教授）の学生4チームが参加。原佑裕子さん（3年次）のプランが優秀賞に選ばれ、東京での全国大会（12月6日）に臨んだ。

原さんの発表は「車載型ペットロボット」。音声やセンサーの情報で作動するロボット技術からペットロボットを製造し、車内のドライブレコーダーやカーナビなどと連動させ、レンタカー会社に売り込むアイデアを提案した。

急加速やスピードの出し過ぎ、車間距離の短さなどをロボットが音声で知らせ、ドライバーに安全運転を促す。事故が減れればレンタカー会社の収益率が上昇するほか、「事故を減らす努力をしているというCSR（社会貢献）になると説明。地域のゆるキャラとタイアップすれば話題性も大きいとし、市場性や採算についての検討も加えた。

全国大会には首都圏や大阪などの大学、高専10校が出場。原さんは残念ながら入賞を逃した「緊張して、ロボットを地元川崎の技術で作るという契約での情報提供義務について大事な部分を言い忘れてしまった。でも、ゼミ生の協力でここまでまとめることができて満足です」（原さん）

同ゼミは川崎市などと協力し、2012年度にもゼミ生が富士通の開放特許を活用したビジネスプランの作成に挑戦。「芳香拡散技術」を用いて松本製作所（中原区）が商品化した芳香カード「アロマレ・フレール」の開発に貢献した。

## 法学部ゼミ連論集表彰

### 加川さんが最優秀賞

法学部ゼミナール連合会（以下、法学部ゼミ連）＝（古屋波委員長・法3）の論集表彰式が12月18日、神田キャンパスで白藤博行法学部長らが出席して行われた。最優秀賞は加川俊さん（法3・大澤逸平ゼミ、柴田隆ゼミ）の「フランチャイズ契約での情報提供義務について」。

加川さんの作品は1万8000字の大作。「夏期休暇を費やして仕上げました」と話す。応募作品は論集（第6号）として発行されるが、加川さんは編集作業も担った。

法学部ゼミ連は、法学部の専門、教養の69ゼミの代表者で組織され、各ゼミの交流を深めるためにさまざまな活動を行っており、論集表彰もその一環。賞は、法学部ゼミ連の顧問である佐々木和夫准教授をはじめ、教員と学生による評価点の合計によって決まる。

そのほかの表彰者は次のとおり。

▽優秀論文賞＝津本真理子さん（法3、佐々木和夫ゼミ）「原発訴訟における抗告訴訟の在り方」

▽審査員特別賞＝宮本采也加さん（法3・平田和一ゼミ）「任能力判定」

▶加川さん（中央）と津本さん（左）、宮本さん

## 文学部・川上隆志ゼミ

### ▲『SHOW』第9号刊行
### 「働くこと」と私

文学部日本文学文化学科の川上隆志ゼミ（編集・出版学）が毎年発行している雑誌『SHOW』の第9号が刊行された（A4判・112ページ）。今号のタイトルは『「働くこと」と私』。大学生にとって最大の関心事である「就職」をテーマに、さまざまな企画が掲載されている。

同誌はゼミ生が企画、構成、取材、撮影、紙面製作、校正など刊行までの一連の作業をこなす。

編集長の五十嵐藍美さん（文3）は「読ませるページと見せるページを意識したメリハリのある構成にしました」と今号の特色を話す。

大特集は「農業×職」。「農業が『魅力ある一つの職業である』ということを改めて考えていただけたら幸いだ」（久保彩乃さん・文3）という文章に思いが込められている。

このほか、「伝統工芸を売り込む」や、日本の中小企業の現状を伝える「ものづくり」などを掲載。五十嵐さんは「情報を得やすい職業ではなく、大学生の目に留まりにくい職業に着目しました。仕事について考えるきっかけに」と狙いを語った。

小特集「島に生きる」では、〝にゃんこ島〟として知られる宮城県石巻市の田代島を取材。猫と暮らす人々の生活や文化を紹介するとともに、人口減少が進む島の今後に警鐘を鳴らしている。

また、巻末の「日語日文学会」は「Zemitter（ゼミッター）」や「突撃！隣の研究室」など、日本語学科・日本文学文化学科を紹介する内容で、「1年次生にゼミを選ぶ際の参考にしてほしい」と五十嵐さん。

希望者は生田キャンパス10号館の川上隆志研究室へ。

▲最新号を手に笑顔のゼミ生たち

## インターンシップ

### 人文・ジャーナリズム学科
### マスコミなどに32人参加

文学部人文・ジャーナリズム学科の3年次生32人が夏期休暇中に行ったインターンシップの成果発表会が12月6日、神田キャンパスで開かれ、ジャーナリズム系の企業や機関などでの就業体験が披露された。学生たちは実務を体験することで仕事の意義を再認識し、卒業後に向けて準備を進める。

同学科のインターンシップは3回目。32人の受け入れ先は教員の幅広い交友関係を生かし、全国紙の新聞社、放送局、大手印刷会社、出版社、NGOなど23社・団体。インターネット関連のヤフーも初めて加わった。

当日は山田健太、野口武悟、藤森研、植村八潮の各教授のほか、受け入れ先の担当者も多数参加し、学生たちの発表を聴いた。

▲人文・ジャーナリズム学科の発表会

▲経済学部の発表会

9月に12日間、毎日新聞とうきょう支局で記者体験をした田邉拓也さんは新聞記者志望。

「初日から（取材に）行けと言われ、東京大空襲の慰霊祭や世田谷区長の記者会見などに同行。終盤、蒲田でネコが大量死した事件では、『犯人を探せ』と。本当に自由にやらせていただきました。取材は数をこなすことが大事と教えられました」と振り返る。

「女性写真家の笹本恒子さんの個展を取材し、原稿はたくさん直されましたが、写真とともにベタ記事（小さい見出しの短文）が署名入りで紙面（とうきょう版）に載りました。うれしかったです」

情報公開制度の利用を広めているNPO法人情報公開クリアリングハウス（三木由希子理事長）で約10日間、インターンシップを行った花岡あずみさん。公開文書の目次作成、自治体の情報収集や調査、勉強会参加などに取り組んだ。

花岡さんは「あまり身近ではなかった情報公開制度について基礎から学び、自分で情報を取って判断する大切さを学びました」と感想を述べた。

## 経済・20カ所

### 20カ所に23人

経済学部の「学外特別研修（インターンシップ）」の発表会が12月13日、生田キャンパスで開催された。

今年度は、23人が20カ所の研修先で就業体験を行った。参加学生は研修先ごとに、パワーポイントを用いて研修内容や成果を報告。

受け入れ先企業の方も聴講に訪れるなか、「インターンシップに行ったことが成長ではなく、それを今後に生かすことが成長につながる。これからの学生生活を頑張りたい」などの感想が報告された。

## 人間科学部・岡田ゼミ

### 解析ソフトコンクールで佳作
### MLB打者の「強さ」数値化

人間科学部心理学科の3年次生が米大リーグ（MLB）のデータを統計学的に分析し、解析ソフトの研究コンクール「2014年度S-PLUS & Visual R Platform学生研究奨励賞」（NTTデータ数理システム主催）で佳作に入選した。

受賞したのは岡田ゼミ（指導・岡田謙介准教授）で心理統計学を学ぶ北條大樹さん、八田大輝さん、小川泰史さんの3人。野球好きの八田さんの発案で、公開データが豊富なMLBをテーマに選定。「打率とか本塁打数とか一般的なデータを分析し、その背後にある潜在的な強さの要因を解明しようと思いました」と北條さんはねらいを説明する。

1871～2013年に在籍した延べ14万447人の選手のデータのうち、投打の各13項目を選別して小川さんが分析し、野球成績をポイント制にして北條さんが分析し、野球に詳しい八田さんが結論をまとめた。

「打力と言っても内野安打で出塁する力、本塁打を打つ力とさまざま。三塁打の数が多ければ足が速いというように、打撃を構成する因子をあぶり出し、数値化しました」（八田さん）

その結果、打力を裏打ちする因子として「足の速さ」「安打力」「選球眼」の3項目が浮上。数値化することで個々の選手はもとより、チームの個性や強み、弱点が明らかになった。

八田さんは「トレードや補強でチームの3項目のバランスが崩れると、上位になれない。バランスが大事だと数値から読み取れました」と力を込める。

データと格闘すること約3カ月。細かい作業をこなした小川さんは「選手の個性が数値で示されるので楽しかった」と話す。大学院生に交じっての入選に、野球好きな岡田准教授からは「すごいね、次は最優秀賞を目指そう」と発破をかけられた。

3人は「感覚や経験則でなく、数値で勝敗を予測できるところまで精度を高めたい」と意欲を燃やしている。

▶左から八田さん、小川さん、北條さん

## ネットワーク情報学部

### プロジェクト発表会
### 26チームが展示

ネットワーク情報学部の吉田プロジェクトや、「プロジェクト」の発表会が12月21日、生田キャンパスで開かれた。学生たちは学内外からの来場者に対し、1年間の活動の成果を熱心にプレゼンテーションした。

今年度は26チームがポスターや制作物を展示。生放送でストリーム配信の道案内ツールを開発した吉田プロジェクトや、人間の手の動きとロボットの動きをリンクさせた直観操作ロボットを作成した石原プロジェクトなど、特色あるアプリケーションやゲームなどが発表された。この模様は「かわさきワンセグ」（福富・佐竹プロジェクト）が

また、2月7、8日には同学部の学生有志による学外展示会「コウサ展2015」が日本科学未来館（東京都江東区）で開催された。

▲AR技術を用いた制作物を展示した吉田プロジェクト

## ネットワーク情報学部・綿貫プロジェクト

### 神情協ーITコンテスト
### 「水量計測プログラム」入賞

▶左から平子さん、岩城さん、綿貫教授、根来さん、弘中さん

ネットワーク情報学部・綿貫プロジェクトのメンバーが考案した企画が学生ーITコンテスト（主催・神奈川情報サービス産業協会）で入賞した。

同コンテストは大学生、大学院生、専門学校生を対象にIT業界の未来を創造する斬新なアイデアを発表する場。応募37作品（ーITプロダクツ10点、ビジネス企画27点）の中から9作品が選ばれ、11月27日に横浜市のクイーンズフォーラムで最終選考会・発表会が開かれた。

参加した同プロジェクトのメンバーは、岩城弘祐さん、根来祐輝さん、平子昌仁さん、弘中聡一さんの3年次生4人。

水の節約のための水量センサーを考案。各家庭の水道の蛇口に付け、グラフ表示によって「みえる化」し、各家庭で水不足を認識してもらうのが狙い。

2014年の日本の夏は、水害の方が話題になったが、「世界的に見ると水不足が大きな問題になっている。そこに着目した」と岩城さん。岩城さんは組み込み技術、ほかのメンバー3人はネットワーク技術が専門、双方の技術を合わせた提案となった。

約10分間の発表のあと、家庭での使用の可能性などたくさんの質問が寄せられた。

コンテストでは神奈川工科大学の大学院生の作品が最優秀賞。綿貫プロジェクトはベスト3には選ばれなかったものの唯一のハードウェア作品として評価された。

「授業で学んだことを社会に広く発信していくのが社会知性の開発だ」（綿貫教授）との考えを実践した発表となった。

## 経営学部・石崎ゼミ

### 4大学学生有志の「FUTURE2014」
### 3人が参加し、調査・研究

首都圏で広告やマーケティングを学ぶ4大学（専修、駒澤、上智、日本）の学生有志による「第20回大学生意識調査プロジェクトFUTURE2014」に、経営学部・石崎徹ゼミ3年次生の依田利那さん、別府菜々美さん、内田翼さんの3人が参加。大学を超えて集まったメンバーとともに、8カ月にわたって調査・研究活動を行った。

同プロジェクトは協賛である公益社団法人東京広告協会の指導を受けながら、大学生が立案・調査・精査を行う。今回のテーマは「大学生と日本」。4大学の学生を対象にアンケート調査を実施。1126票を回収し、うち800票を対象に考察を加え、「進撃の日本人」と題した一冊の調査報告書にまとめた。

成果を発表する記者発表会が12月3日、東京の銀座電通ビルで行われた。「大学生の9割以上が今の日本が好き。～01年に比べ、9ポイントの増加～」「大学生の約9割が2020東京五輪開催を歓迎～さらに、大学生の6割は来日する外国人と交流したい！～」「世界に通用したいとは思うが…自信がない人は約8割」など、6つのトピックスを報告した。

▲記者発表会で成果を報告する依田さん

## ネットワーク情報学部

### 国際協力の在り方考える
### スタディーツアー写真展も

昨夏、海外でNGO活動中に撮影した学生の写真展が1月7日から21日まで、生田キャンパス9号館アトリウムで開催された。写真は経済学部国際経済学科の専門科目「NGO論（狐崎知己教授）」を受講し、インド、バングラデシュ、中国、メキシコでのスタディーツアーに参加した学生10人が撮影。現地の子どもたちの表情、地域の様子などを力メラで切り取った。

同科目は、NGOに関する理論と事前研究のあと、夏期休暇中に本学の補助金を得て、地域づくりや、フェアトレードなどさまざまなNGOのスタディーツアーに参加。途上国の人々の自立に役立つ効果的な国際協力の在り方を考える。

インド南部バンガロールなどで2週間、マイクロファイナンス（貧困層向けの小口金融の総称）の現場を訪ねるツアーに参加した鈴木奏子さん（経済3）は一眼レフカメラを携えた。

「狐崎先生から現地の人と目線を同じにして話を聞くことが大切と言われました。撮影もその姿勢を心がけました」とあどけない少女の顔や車座になって会議をする女性たちの姿をとらえている。

▲力作を前に狐崎教授（中央）を囲んで。左から5人目が鈴木さん

## 国際経済学科「NGO論」